

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

I 美しい自然を眺め、あるいは、美しい絵を眺めて感動した時、その感動はとても言葉で言い現せないと思った経験は、誰にでもあるでしょう。諸君は、何とも言えず美しいと言うでしょう。この何とも言えないものこそ、絵かきが諸君の眼を通して直接に諸君の心に伝えたいと願っているのだ。音楽は、諸君の耳からはいつまでもすぐに諸君の心に到り、これを波立たせるものだ。美しいものは、諸君を黙らせませぬ。美には、人を沈黙させる力があるのです。これが美の持つ根本の力であり、根本の性質です。

II 絵や音楽が本当に解るといふ事は、こういう沈黙の力に堪える経験をよく味わう事に他なりません。ですから、絵や音楽について沢山の知識を持ち、様々な意見を吐ける人が、必ずしも絵や音楽が解つた人とは限りません。解るといふ言葉にも、いろいろな意味がある。人間は、いろいろな解り方をするものだからです。絵や音楽が解るといふのは、絵や音楽を感じる事です。愛する事です。知識の浅い、少ししか言葉を持たぬ子供でも、何でもすぐ頭で解りたがる大人より、美しいものに関する経験は、よほど深いかも知れませぬ。実際、優れた芸術家は、大人になつても、子供の心を失つていないものです。

III 諸君は言うかも知れなぬ。なるほど、絵や音楽の現す美しさは、言うに言われぬものかも知れなぬ。これを味わうのには、言葉など、かえつて邪魔かも知れなぬ。《 a 》それなら詩というものはどうなのか、詩は、言葉で出来てゐるではないか、と。だが、詩人とても同じ事なのです。なるほど、詩人は言葉で詩を作る。しかし、言うに言われぬものを、どうしたら言葉によつて現す事が出来るかと、工夫に工夫を重ねて、これに成功した人を詩人と言うのです。

田児の浦ゆ打出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪はふりける

これは、山部赤人の有名な歌で、誰でも知っている。歌の意味も、読んで字の通り、誰にでもわかる。現代使われていない言葉は、「田児の浦ゆ」の「ゆ」といふ言葉だけだ。「ゆ」といふのは、例えば東京から神戸へ、の「から」といふ現代の言葉に当たります。もし諸君が、この歌を読んで、美しい歌だと思つたら、諸君に美しいと思わせるものは、この歌の文字通りの意味ではないでしょう。やはり、富士を見た時の言うに言われぬ赤人の感動が、諸君の（ 1 ）を打つからではありませんか。歌人は、言い現し難い（ 2 ）を、絵かきが色を、音楽家が音を使うのと同じ意味合いで、（ 3 ）を使つて現そうと工夫するのです。なるほど、詩人の使う言葉も、諸君が日常使つてゐる言葉と同じ言葉だ。言葉といふものは、勝手に一人で發明できるものではない。歌人でも、皆が使つて、よく知つてゐる言葉を取り上げるより他はない。ただ、歌人は、そういう日常の言葉を、綿密に選択して、これを様々に組合せて、はつきりした歌の（ 4 ）を、詩の形を、作り上げるのです。すると、日常の言葉は、この姿、形のなかで、日常、まるで持たなかつた力を得て来るのです。赤人の歌が、見たところ、どんなに楽々と自然に、まるで、赤人の感動が、そのまま言葉となつてゐるように思われようとも、実は、大変な苦心が ① ているのです。苦心など表に現さぬところが、大歌人の苦心なのです。

IV さて、前に、諸君が日常生活で、どんな風に、眼を働かせてゐるかについて述べたが、ここでも、では、どんな風に言葉を使つてゐるかを反省してみ下さい。（中略）日常生活では、言葉は用事が足りたら、みな消えてなくなる。そういう風に使われていることに、諸君は気が附かれるでしょう。言葉は、人間の行動と理解との為の道具なのです。

V ところで、歌や詩は、諸君に、何かをしると命じますか。私の気持ちか理解できたかと言つてゐますか。諸君は、歌に接して、何をするのでもない、何を理解するのでもない。その美しさを感じるだけです。何の為に感ずるのか。何の為でもない。ただ美しいと感ずるのです。歌や詩は、解つてしまへば、それでおしまいというものではないでしょう。《 b 》、歌や詩は、わからぬものなのか。そうです。わからぬものなのです。この事をよく考へてみて下さい。ある言葉が、かくかくの意味であるとはわかるには、Aという言葉を、Bという言葉に直して、Aという言葉の代りにBとい

う言葉を置き代えてみてもよい。置き代えてみれば合点が ㉒ という事でしょう。赤人の歌を、他の言葉に直して、歌に置き代えてみる事が出来ますか。それは駄目です。ですから、そういう意味では、歌は、まさにわからぬものなのです。歌は、意味のわかる言葉ではない。感じられる言葉の姿、形なのです。言葉には、意味もあるが、姿、形というものもある、ということをよく心に留めて下さい。

VI 言葉の姿と言っても、眼に見える活字の恰好ではない。諸君の心に直に映ずる姿です。この歌の姿という事は、古くから日本の歌人が、歌には一番大切なものと考えて来たものです。西洋では詩のフォームと言い、このフォームという言葉は、今日、形式と訳されて使われておりますが、フォームという西洋でも古い言葉は、日本にも古くからある姿という言葉で訳す方が、よほどいい訳なのです。それはともかく、姿のいい人がある様に、姿のいい歌がある。歌人の歌の言葉は、真白な雪の降った富士の山のような美しい姿をしているのです。だから、赤人は、富士を見た時の感動を、言葉に現した、あるいは言葉にした、と言うよりも、そういう感動に、言葉によつて、姿を与えたと言った方がいいのです。感動というものは、読んで字の如く、感情が動いている状態です。動いているが、やがて静まり、消えてしまうものです。そういう強いが不安定な感動を、言葉を使つて整えて、安定した動かぬ姿にしたと言った方がいいのです。

VII 私たちの感動というものは、自ら外に現れるものだ。顔の表情となつて現れたり、叫びとなつて現れたりします。《 c 》、感動は消えてしまうものです。だが、どんなに美しいものを見た時の感動も、そういうふう自然に外に現れるのでは、美しくはないでしょう。そういう時の人の表情は、醜く見えるかも知れないし、また、滑稽に見えるかも知れない。そういう時の叫び声にしても、決して美しいものではありませんまい。

VIII 例えは諸君は悲しければ泣くでしょう。でも、あんまりおかしい時でも涙が出るでしょう。涙は歌ではないし、泣いては歌は出来ない。悲しみの歌を作る詩人は、自分の悲しみを、よく見定める人です。悲しいといつてただ泣く人ではない。自分の悲しみに溺れず、負けず、これを見定め、これをはつきりと感じ、これを言葉の姿に整えて見せる人です。

IX 詩人は、自分の悲しみを、言葉で誇張して見せるのでもなければ、飾り立てて見せるのでもない。一輪の花に美しい姿がある様に、放つて置けば消えてしまう、取るに ㉓ 小さな自分の悲しみにも、これを粗末に扱わず、はつきり見定めれば、美しい姿のあることを知っている人です。悲しみの歌は、詩人が、心の眼で見た悲しみの姿なのです。これを読んで、感動する人は、まるで、自分の悲しみを歌つて貰つたよな気持ちになるでしょう。悲しい気持ちに誘われるでしょうが、もうその悲しみは、ふだんの生活のなかで悲しみ、心が乱れ、涙を流し、苦しい思いをする、その悲しみとは違つてでしょう。悲しみの安らかな、静かな姿を感じるでしょう。

(小林秀雄「美を求める心」による。一部改変)

問一 空欄《 a 》《 c 》に入る語をそれぞれのア～エから一つ選び、符号で答えなさい。

- |   |        |       |       |        |
|---|--------|-------|-------|--------|
| a | ア しかし  | イ そして | ウ だから | エ なぜなら |
| b | ア そして  | イ だが  | ウ では  | エ なぜなら |
| c | ア あるいは | イ そして | ウ だから | エ なぜなら |

問二 波線部①～④の漢字の読みを書きなさい。

問三 空欄 ① ～ ③ に入る最も適当な語をそれぞれのア～オから一つ選び、符号で答えなさい。

- |   |       |       |       |       |       |
|---|-------|-------|-------|-------|-------|
| ① | ア 思われ | イ 誘われ | ウ 払われ | エ 報われ | オ 養われ |
| ② | ア くる  | イ する  | ウ つく  | エ すむ  | オ ゆく  |
| ③ | ア 足らぬ | イ つかぬ | ウ 取れぬ | エ もれぬ | オ ゆかぬ |

問四 二重傍線部①～⑤は何を意味しているか。一〇字以内で書きなさい。

問五 この文章の筆者は傍線部①「美しいものは、諸君を黙らせませす。美には、人を沈黙させる力があるのです」と同じようなことを別の文章では次のように述べている。( A ) ～ ( D ) に入る最も適当な語をそれぞれのア～オから選び、符号で答えなさい。

美は人を沈黙させるとはよく言われる事だが、この事を徹底して考えている人は、意外に少ないものである。優れた芸術作品は、必ず言うに言われぬ或るものを表現して、これに対しては学問上の言語も、実生活上の言葉もなすところを知らず、僕等はやむなく口を ( A ) のであるが、一方、この沈黙は空虚ではなく ( B ) に充ちているから、何かを語ろうとする衝動を抑え難く、しかも、口を開けば嘘になるという意識を眠らせてはならぬ。そういう沈黙を創り出すには大手腕を要し、そういう ( C ) に堪えるには作品に対する痛切な ( D ) を必要とする。

(小林秀雄「モーツァルト」による。一部改変)

- |   |       |        |        |       |      |
|---|-------|--------|--------|-------|------|
| A | ア 固める | イ きわめる | ウ すべらす | エ つぐむ | オ 開く |
| B | ア 印象  | イ 感覚   | ウ 感動   | エ 好感  | オ 刺激 |
| C | ア 苦痛  | イ 印象   | ウ 経験   | エ 沈黙  | オ 美  |
| D | ア 愛情  | イ 驚嘆   | ウ 思索   | エ 分析  | オ 理解 |

問六 傍線部②「言葉は用事が足りたら、みな消えてなくなる」と同じことを述べている箇所を段落Ⅴから一〇字以上二〇字以内で抜き出ささい。(句読点・記号も字数に含む)

問七 傍線部③「歌は、意味のわかる言葉ではない」はどのような意味か。その説明として最も適当なものをア～オから選びなさい。

- ア 歌の言葉の意味を解釈することは歌の理解を妨げる。
- イ 歌は作者が個人的な思いを歌っているので他人には理解できない。
- ウ 歌は文語で書かれることが多いので現代人には意味が分からない。
- エ 歌の言葉は理解されるためのものではなく、感じられるためのものである。
- オ 歌は小さい詩形なので作成時の状況や作者についての知識が無いと理解できない。

問八 段落Ⅲの ( 1 ) ～ ( 4 ) に入る最も適当な語をア～オから選び、符号で答えなさい。符号は一度だけ選択すること。

- |      |      |      |     |     |
|------|------|------|-----|-----|
| ア 意味 | イ 感動 | ウ 言葉 | エ 心 | オ 姿 |
|------|------|------|-----|-----|

問九 山部赤人は、どのようなことをしたのか、段落Ⅵを読み、その本文の内容から赤人のしたことを三〇字以内で書きなさい。(句読点・記号も字数に含む)

二 次の問いに答えなさい。

問一 ①～⑤の□に動物を意味する漢字一文字を入れて、慣用句を完成させなさい。

- ① □を追うものは山を見ず  
目先のことはかりに気を取られて、他のことがなおざりになること。
- ② □の甲より年の功  
年長者の経験は尊ぶべきであること。
- ③ 閑古□が鳴く  
商売などがはやらずにさびれている様子。
- ④ □の道はへび  
同類のものは互いによく通じていること。
- ⑤ □をかぶる  
もともとの性質を隠して、人の前ではおとなしそうにふるまうこと。

問二 ①～⑤の□の中に入る適切な語を【 】の中から選び、漢字に直して四字熟語を完成しなさい。また、意味をア～オから選び、符号で答えなさい。符号は一度だけ選択すること。

- ① 本末転□    ② □田引水    ③ 深□遠慮    ④ □心伝心    ⑤ 当意即□
- 【 い      が      とう      ぼう      みよう 】

- ア 先のことまで深く考えて計画を立てること。
- イ 自分に都合のよいように説明したり、物事を運んだりすること。
- ウ その場の状況や変化に対して、機転をきかして対応すること。
- エ 根本的なことと枝葉のこととを取りちがえること。
- オ 考えていることが言葉を使わなくても互いに分かり合えること。

問三 ①～⑤の三つの□に共通する漢字をア～コから選び、符号で答えなさい。符号は一度だけ選択すること。

- ① 景□      異□      □気
- ② □限      電□      □彩色
- ③ 先□      誕□      □地
- ④ □印      注□      □次
- ⑤ 端□      □戦      鼻□

- ア 観      イ 期      ウ 極      エ 色      オ 生
- カ 大      キ 緒      ク 的      ケ 能      コ 目